

令和6年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる
「共同研究班」 研究報告書

令和6年4月30日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域と国際関係（史）・地政治		
担当者	氏名	所属機関・職	
	岩下明裕	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授	
班員	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	熊野直樹	九州大学教授	欧亜関係史
	松井康浩	九州大学教授	ソ連史・国際関係
	平井一臣	鹿児島大学名誉教授	東アジア政治史
	研究テーマ		
戦間期におけるドイツ＝東アジア関係と現代アジア政治			

研究成果の概要

「共同研究班」での報告者の主たる課題は「間氷期」という観点からロシア・ウクライナ戦争勃発以降における日本と韓国の諸対応について、ソ連・ロシア政治（岩下明裕氏・松井康浩氏）及び日本政治の研究者（平井一臣氏）とともにドイツ政治担当として比較研究、とりわけロシア＝ウクライナ戦争後におけるアジアの対露「制裁」の中身（特に日韓）を比較考察することであった。そのために、当初の研究計画に基づいて2024年8月上旬に岩下・松井・平井氏とともに韓国釜山に出張し、そこで韓国外交の専門家を訪問し、韓国政府による対露制裁及びそれについての専門家に聞き取りを行うとともに、討論を行った。

まず8月8日には釜山外国語大学の Son Kisup 教授を訪問し、聞き取り及び討論を行った。Son Kisup 教授によると、ウクライナ戦争後、グローバルな中枢国家は自由・人権・国際法に基づきロシアを批判し、アメリカはウクライナへの武器供与の協力要請を行ったが、これらに対し韓国は消極的であった。そうしたなかロシアと北朝鮮との同盟強化によって、韓半島で「新冷戦」が生じているが、この間の尹政権の外交・安全保障は評価できるとのことであった。

次に8月9日に東西大学の Jekuk Chang 総長及び Jung-wa Shin 所長を訪問し、聞き取り及び討論をおこなった。Jekuk Chang 総長によると、韓国におけるウクライナ戦争への国民の関心は低く、ロシア＝北朝鮮同盟後の韓国の対露制裁の実質化に対して、韓国はそもそもロシアとの関係は悪くなく、制裁には参加するが、なるべく避けたいとのことであった。それに対してロシアは「非友好国の中での友好国」として韓国を位置付けており、韓国は、ロシアとの関係の見直すことはなく、対ウクライナへの武器供与もないとのことであった。日韓の国際法認識については、日本が国際法遵守なのに対して、韓国は国際法、特に西欧中心主義の伝統的な国際法に対して不

信感があり、その一方で、人権に対しては強い関心があるとのことであった。

研究成果の概要（続き）

2024年8月当時の韓国は、ロシアとの関係は維持し、ロシア＝ウクライナ戦争への介入は避けたいようであった。しかし、その後の北朝鮮のロシア派兵によってロシアとの関係は転換を余儀なくされることになり、朝鮮半島における「新冷戦」の段階ないしは東アジアにおける「間氷期」終焉の始まりともいえる状況に入ったという仮説は可能であろう。

「共同研究班」での報告者の別の課題は、「2022年のロシア＝ウクライナ戦争は、『間氷期』（新戦間期）ロシアのセキュリタイゼーション（安全保障化）の結果生じた」という仮説を両大戦間期（戦間期）の20年との比較を通じて、検証することであった。その際、戦間期においてセキュリタイゼーションの結果、戦争が生じた事例はあったのかということが問題となるが、まさにその事例が、戦間期のドイツと1941年に勃発した独ソ戦である。そもそもセキュリタイゼーションは近年の概念であるが、しかし戦間期の状況もまた、外敵のみならず、内なる敵を「ポリシェヴィズム（共産主義）の危険」と見なし、これに対抗すべくドイツはナチズム体制の成立及び独ソ戦へと向かって行った。これも一種のセキュリタイゼーションの事例といえ、「間氷期」におけるロシアと比較研究することは上記の仮説の検証にとっても有用である。そこで「共同研究班」の成果報告会において、戦間期ドイツのセキュリタイゼーション（安全保障化）の結果、独ソ戦が生じた過程を史実に基づいて実証的に検証し、上記の仮説の有効性を示すことができた。以上が、「共同研究班」における報告者の研究成果の概要である。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

- ・熊野直樹「膠州領土地令の史的展開—中華民国の土地改革政策との関係を中心に—」『法政研究』91巻3号、2024年、111～135頁（謝辞無し）。
- ・同「書評・工藤章著『ドイツ資本主義と東アジア 1914 - 1945』」『社会経済史学』90巻3号、2024年、133～138頁（謝辞無し）。
- ・同「戦間期ドイツのセキュリタイゼーション（安全保障化）—「ポリシェヴィズム（共産主義）の危険」から独ソ戦へ—」（SRCW/共同利用共同拠点成果報告会：コメンテータ・平井一臣/松井康浩、司会・岩下明裕）北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2025年3月3日（謝辞有り）。

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）
無し

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。